

当方見聞録（4）

福島 憲仁

1. 日本最初の宇宙SF劇 — 帝国座から 100年

前回、本誌に書かせていただいたのは2000年で、今回で4回目となる。この間、10年の歳月が流れてしまったが、そのおかげで大阪最初の洋式劇場帝国座ができてちょうど100年という年に皆さんと再会できることになった。川上音二郎・貞奴という風雲の二人が苦労と借金を重ねて作った帝国座。これが丁度100年というのに注目する論評をついぞ見かけず、淋しく思っていたところに貴重な機会を与えていただき、感謝申し上げたい。「月刊うちゅう」の読者の皆さんには一度帝国座跡に足を運んでいただき、わが国にヨーロッパ流の演劇をもたらし、そして最初の女優として活躍した貞奴たちに思いを馳せていただければ実にありがたい。なにせ日本で最初に宇宙SF劇を演じたのはこの二人なのだから。

中之島の南を流れる土佐堀川。そこにかかる淀屋橋と肥後橋の間に三井住友銀行の大阪本店がある。永らく住友を象徴するかのような威厳を備えた建物として君臨してきた。この付近には住友関連企業の建物がたくさん集まっています。巷間、住友村とも言われている。その三井住友銀行の南側道路の斜め向いに7階建てほどのビルがあり（最近使われていないようだが）、その道沿いに「帝国座跡」という小さな石碑が置かれている（写真1）。低いため、気づかずに通り過ぎてしまう人が大半だ。今から100年前、ここに「ヨーロッパ調に日本風を加味した遊び心が感じられる」1200名定員の立派な劇場が建っていた（写真2）。レズリー・ダウンナーによれば（マダム貞奴、集英社刊、2007、木村英明訳）、それは「レンガと石で建てられ、擬イオニア式の柱と、上にバルコニ

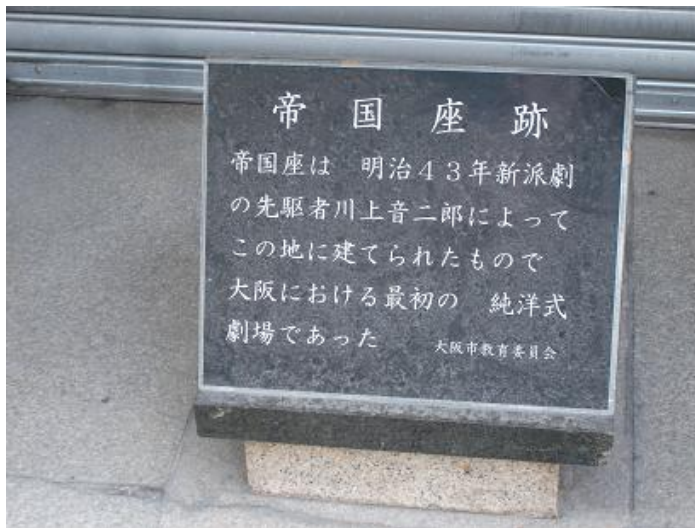


写真1. 帝国座跡の碑

ーがついている三つの立派なアーチ型の入り口があり」、というびっくりするようなものだった。びっくり、というのは当時の大阪の町家は昔ながらの木造平屋が当たり前だったからだ。



写真2. 帝国座。(株)大林組のホームページより

こけら落しの出し物はジュール・ヴェルヌの「80日間世界一周」の翻案もので、日本人福原が70日で世界を一周するというSF劇だった。川上音二郎・貞奴が伝統的な日本演劇界から異端視されていたという事情もあったろうが、こうした演目を取り上げた背景には日露戦争を経験し、科学技術力の重要性が一般にも浸透してきたという事情も手伝っていたのではないかと想像される。そして、その次、同年11月、つまり今から丁度100年前に上演したのが「星世界探検」で、これこそわが国最初の宇宙SF劇だった。黒岩涙香が訳したグリフィスの「新説破天荒」が原作だそうだが、地球から飛び立った主人公が太陽系の惑星を巡り、そこに住む人たちと友好を交わして帰ってくるというような話だったらしい。「観客が熱気球で宇宙を旅しているような感覚を与えるために、眩しいような照明効果を用いた。旅人たちは天使や長い耳をした月の住人や、赤い肌の色をした美しい火星の女性と出会う」ような演出であった（ダウナー、同上著）。そう言えば、ヨーロッパ流の舞台照明を最初に導入したのは彼らだったらしい。電気が珍しい時代だった。

音二郎・貞奴の二人はアメリカを経て、1900年、パリ万博で公演し、大きな評判をとった。当時ヨーロッパはちょっとした日本ブームだったことも手伝っていた（浮世絵に魅了された印象派の画家たちの活躍は1870年頃から。それに遅れてスペインからやってきた若きピカソは音二郎・貞奴の宣伝ポスターを作り、作曲家プッチーニは蝶々夫人の作曲のため貞奴にわざわざ会いに行った）。このパリ万博は電気の博覧会とも呼ばれたほどで、新しいエネルギー源である電気の大きい将来性を約束した博覧会であった。そうしたヨーロッパの息吹に触れ、彼らはそれを日本に移そうとした。

二人は日本演劇界にあっては居心地が悪かった。歌舞伎に代表される伝統的演劇界に入る余地はなかったし、音二郎はそれに対抗する新派を立ち上げて

はみたが、まだ歌舞伎の色合いを濃く漂よわせていた。しかし、アメリカ、ヨーロッパ各国を回るうち、彼らは完全に西洋演劇のとりこになっていた。まず、女はご法度という旧劇に対し、女を演ずるのは女、という今から見れば当たり前過ぎることを貞奴はやってのけた。わが国で最初の女優と言われるゆえんである。そこで選ばれた演目はシェークスピアであり、SFであった。時代を駆け抜けていこうとした彼らにこそ相応しい取り合わせだったに違いない。

こうした新しい息吹を受け入れたのは重い伝統に縛られた東京ではなく、新興の勢いに乗った工業都市大阪であった。たしかにそれはそうだったが、帝国座自身の運命ははかなく、翌1911年、川上音二郎が47歳で生涯を閉じると間もなく（1913年）二人の夢であった帝国座は彼らの手から離れていく。伊藤博文が貞奴を通じて支援してできた帝国座であったが、建設費は借金で賄われていた。彼らがいくら芝居で頑張っても、席料で贖える額ではなかった。

目の前に明治の終りが迫っていた。間もなくヨーロッパは第一次世界大戦へ突入し、ドイツは科学技術の成果を戦闘機や潜水艦、毒ガスといった新兵器に結集していった。それを脇目に日本も科学技術の進展こそ第一の富国強兵策と考えた。大阪は工業都市として重要性を増し、大いに栄えていった。その先鞭をつけたのが帝国座、と言うのは言い過ぎとしても、そうした新しい時代の象徴の一つではあったと思う。

2. 岡山天体物理観測所開所 50年

岡山県倉敷市から少し西へ行ったところに国立天文台岡山天体物理観測所がある。1960年に開所したので、丁度50年である。同所の口径188cm望遠鏡は当時、世界で7番目ほどの大きさを誇っていたが、今では50番目に入るか、入らないかというランクになってしまった。すばる望遠鏡ができて以来、その影は薄くなる一方だ。が、アジア有数の気象条件の良いサイトであることに加え、信頼性の高い望遠鏡として活躍中である。ところで、近時は財政難である。加えて、国立天文台には様々な新しい計画もあり、あれもこれもとはいかない懐具合だから、「岡山はどうするのよ？」という議論が出てくる。一方、京都大学が口径3.8mの新型望遠鏡を製作中で、これを同所内に設置しようとしており、どうする論に拍車がかかる。

日本の天体物理学の観測的研究は岡山天体物理観測所から始まったと言われている。明治期にヨーロッパ流天文学に接して以来、先達はそれを取り入れようとしてきた。まずは基本的な天体の位置観測や時刻決定、そして天体の力学の導入と進み、恒星や銀河の正体に迫るといふ天体物理学は理論の導入から始まり、少し実験的なものを、と言っているうちに長い戦争になり、明治以来100年にしてようやく岡山天体物理観測所ができた。これで何とか欧米の水準に迫ることができた。天体の位置観測などは口径20cm程度の望遠鏡を備えた装

置で十分である。というより、これ以上大きくなると歪みが出たり、環境になじませるのが難しかったり、精密観測には向かないから、この程度で納得するしかないが、一方、星や銀河や星間空間など遠方の天体を相手にする天体物理学的観測では望遠鏡は大型に限る。多少画像が歪んでいようが、大きいことは良いことで、設備は大きいに越したことはない。つまり、天体物理学実験はお金がかかる。だから、おいそれとはいかなかったのだ。

1960年頃には電波天文学が盛んになり、間もなくX線天文学も生まれようとしていた。アメリカでは当時世界最大の口径5 m望遠鏡により宇宙膨張が精密測定され、またクエーサーというとても大きく大きな赤方変位を見せる天体が見つかったりというように、現代的な天体物理学が爆発的発展を見せるための準備がなされていた。岡山はそんな時代の中型望遠鏡だったから、世界をリードするような研究がたくさん生まれることは期待できなかった。それを見て、口さがない人達は「当時の天文学者は見る目が無かった」となじる。しかし、戦後間もない貧しい当時、待望の天体物理学実験装置としてこの望遠鏡を選択したのは決して間違っていなかったと筆者は思う。その後、観測天文学を目指す学生たちは岡山に詣で、そこから多くを学んでいき、すばる望遠鏡へとつながったのである。私たちは時代の制約から逃れることはできないのだ。

京都大学付属の花山天文台は研究機能を残しつつ、社会教育的活動はNPOが行うという新しい形でここ何年か運営している。その御苦労たるや大変なものと思うが、大学付属の研究所の新しい試みとして注目されている。アメリカ・ロサンゼルス郊外にあるウィルソン山天文台は2.5 mのフッカー望遠鏡で有名だった。かつてハッブルが宇宙膨張を見つけるのに用いたのはこの望遠鏡である。しかし、寄る歳には勝てず、1980年頃、閉鎖するという話が持ち上がった。この時、「まだまだ使えるのにもったいない。皆でお金を出し合っで・・・」という手紙（電子メールではない！）をケンブリッジ大学のグリフィンが世界中の関係者に出しまくったが、どうも反応が芳しくなかったらしく、その後、研究に使われることはなかった。

下世話な話で申し訳ないが、天文台の望遠鏡を1夜動かすのにどれくらい経費を要するか、当ってみよう。実際のデータがあるわけではないので全く勝手な推量で恐縮だが、岡山クラスなら年間維持費1.5億円で何とかできよう。年間300日位は使えるだろうから1夜50万円である。岡山では5日程度を各研究者に割り当てているので、1回の観測に250万円ほどかけている勘定になる。これでデータがとれれば良いが、悪天候だったりするとパーだから、有用なデータにするにはその3倍、ざっと700万円ほどかかると見て良い。これには望遠鏡の償却費などは入っていないから、それも含めると相当膨れる。つまり、データ1件に約千万円もかかっているのである。誰にどう望遠鏡を使わすか、

真剣に審査されるのももっともだ。研究成果は論文として発表されている。岡山から年間20本ほど出ていると、観測成果が全て論文になったという勘定になるが、めでたくこの数値は十分クリアーしているようである。岡山が事業仕分けされるとなるとこのあたりの数値が目安になるのかな、と思う。

岡山観測所は50年を迎え、今、こうした試練を受けている。ここでは無味乾燥に経費と論文数に集約してしまっただが、ここで教育を受けた人たちへの効果やその後研究者や教育者になった効果、そうした方々から影響を受けた人たちへの効果など、測りきれない要素がいっぱいある。殊に、岡山観測所は待望の天文台だっただけにこうした目に見えない効果が大きい。だからと言ってNPOで支えきれぬ金額ではなかろうし、さて、この先どうなるか、国立天文台の動向を注視したい。宇宙には夢がいっぱいと言うが、宇宙を見る道具には苦労がいっぱいなのだ。



写真3. 188cm 望遠鏡ドーム

3. 君よ知るや西堀栄三郎（ 1903-1990 ）

先だってたまたま大阪市立科学館で西堀峯夫氏にお会いする機会があった。氏は現在ドイツ在住で、真空技術関連の会社を運営している物理学者である（写真4）。西堀と言え、我々がすぐ思い浮かぶのは西堀栄三郎（1903-1990）である。現在に続く南極観測隊の最初の越冬隊長が西堀栄三郎で、彼の指導力により南極の厳しい冬を過ごすことができ、その後の南極観測の基礎を築いたという話は有名だ。その西堀栄三郎の三男が西堀峯夫氏である。

西堀の南極観測は1956年のことで、岡山観測所開設時に近い。岡山は初めての天体物理観測所、西堀のそれは本格的な南極観測の最初という点で、共に、戦後復興を遂げつつあった当時の日本を象徴するような成果だった。南極観測へかける夢は今では想像できないほど大きく、全国民の心をとらえていた。

「なんだか良く分からないが、とてつもないことをやるらしい」ということで国民は燃え上がっていた。西堀は一躍有名人となった。



写真4. 西堀峯夫氏、館長室にて

しかし、ずっと南極観測隊長ではなし、「彼は一体、何者？」と問われると、にわかに答えるのは難しい。西堀栄三郎は京都大学在学中、来日したアインシュタイン夫妻を京都・奈良に案内したことがあった（1922年、写真が残っている）。長兄が貿易商をしており、外国語には幼少の頃から親しんでいたという。今

西錦司などと共に京大山岳会を結成し、こよなく山を愛した。化学科を卒業後、助教授になるも民間企業へ行き、真空管の開発をやったと思ったら、また大学に戻って、今度は南極。そして原子力研究所に入り、と八面六臂の活躍をした。「石橋を叩けば渡れない」、「出る杭はのばせ」などの語録は有名。いずれも現場から得られた経験則だった。

峯夫氏は、栄三郎は工夫の人だったと言う。たとえば、南極で越冬するには大変な設備を要する。ストーブが切れたら全員凍死である。勿論、最高に洗練され確かめられたストーブを調達し、持って行くけれど、絶対故障しないとは言いきれない。そこで、まずストーブは壊れるもの、という前提に立つことだ。すると気持ちに余裕が生まれ、実際壊れた時に慌てなくて済む。実際故障したらあきらめずに、希望を持って、工夫して故障を直す。道具がなければ道具を作り、流用できる部品は流用して、という主旨のことを紹介していただいた。西堀はこうした工夫を重ねて初めて、越冬に成功したというのである。

このあたりの教訓は何も南極探検に限らず、研究現場や生産現場等にも応用可能である。全くもって音二郎・貞奴のことを言ったのではないかと思うばかりだが、「石橋を叩けば渡れない」などにはぐっとくる。小さなことにこだわる余り、ちっとも前に進めない人が、確かに、いる。

その西堀栄三郎記念館が琵琶湖のほとりにある。「探検の殿堂」である（滋賀県東近江市）。西堀の業績はもちろん、科学館として各種実験装置や気象・山岳・南極関係の資料も展示している。一度お運びを！

（ふくしまのりひと：科学評論家）